二つの活用語の間に助詞がある表現

――上代語の「語りし継げば」の類――

佐佐木　隆

一

『萬葉集』の「万代に可多利都夏とし…」〔五・八七三〕と「吾行きて可敝里久流まで…」〔十五・三七〇二〕に含まれる「語り継ぐ」「帰り来」は、言うまでもなく二つの動詞が直接に連なった表現である。一方、「語之告ば古へ思ほゆ」〔三・三三〕と「な行きそと変毛来やと…」〔十二・三三〇〕に含まれるのは、同じ二つの動詞の間に助詞「し」「も」が位置する表現である。(1)

語り継げとし　――――　語りし継げば
帰り来るまで　――――　帰りも来やと

同様に、「梅の花左伎知流春の…」〔三十・四五〇二〕と「いたづらに開香将散」〔三・三三〕、「今日の間を恋暮かも」〔十二・二六四

一）と「見まく欲り恋其晩師之」〔十一・二六八三〕、「大宮人は去別南」〔三・一五五〕と「行く雲の逝哉将別」〔十・一九三三〕、「天の河霧立上」〔十・二〇六三〕と「立者不上山にたなびく」〔七・一二四六〕のどの組でも、一方は動詞が二つ連なったものになっており、他方は同じ動詞の間に助詞「か」「そ」「や」「は」が位置するものになっている。

咲き散る ―――― 咲きか散るらむ
恋ひ暮らすかも ―――― 恋ひそ暮らしし
行き別れなむ ―――― 行きや別れむ
立ち上る ―――― 立ちは上らず

助詞の有無というかたちで対応するこうした組は、そのつもりになれば、かなりの数の例を求めることができる。本稿では、右の諸例の下段に掲げたような、間に助詞がある上代語の表現を取り上げる。(2) そして、それがもつ用法上の特徴について、従来とは異なる視点に立って再検討を加える。(3)

ただし、実際に検討を行うに先だって確認しておくべきことがある。かつてたびたび指摘されたことだが、助詞が二つの動詞の間に位置しえたということは、助詞がない場合でもまた、二つの動詞は意味的に緊密に結び付いてはいなかったことを示唆する。つまり、助詞の有無にかかわらず、二つの動詞はそれぞれがもつ意味を独立的に表すものだった、ということを想定させる。この点から、二つの動詞が連なった上代の表現は、後世のいわゆる「複合動詞」とは異なるのだ、上代にはまだ「複合動詞」と呼びうるものは存在しなかったのだ、という見解や主張が生まれる。

事実、現代の「複合動詞」と呼ばれるものの多くは意味的に結び付いており、間に助詞が入ることを原則として許

容しない（後述）。

連なった上代語の動詞の意味的な関係は後世語のそれよりも緩かっただろう、と推測させる表現はほかにもある。それは、やはり既に指摘されていることだが、禁止の「な」を含む例である。「梅の花知利麻我比多流岡辺には…」〔五・八三八〕と「大夫の思和備乍…」〔四・六四六〕に用いられた「散り紛ふ」「思ひ侘ぶ」に対して、同じ二つの動詞の間に禁止の「な」が位置する、「しましくは落莫乱」〔九・一七四七〕と「国遠み念勿和備曽」〔十二・三一七八〕などの例がある。「荒備勿行年変はるまで」〔二・一六〇〕と「我が故に於毛比奈夜勢曽」〔十五・三五六〇〕は、同じく「な」を含む例である。

「散りな紛ひそ」「思ひな侘びそ」「荒びな行きそ」「思ひな痩せそ」の「な」は、助詞ではなく副詞である。しかし、間に別の語が位置するという現象的な面から見れば、「な」のあるこれらの例もまた、助詞のある諸例と同種の構文として扱ってよい。

連なった二つの動詞にこうした事情があることを考慮すれば、それらについて「結合している」「結び付いている」などと言うのは、少なくとも上代語に関しては不適切である。本稿の以上の論述で、あえて「二つの動詞が連なった表現」と述べたのは、両動詞の意味的な関係に配慮してのことである。あるいは、両動詞については「重なった」「連接した」と言うこともできるだろう。

また、以上の論述で、二つの動詞の間に「助詞が位置する」「助詞がある／助詞がない」と述べたのは、あくまでも形態面での現象を客観的に描写しようとしたためである。「助詞を挿入する」というような言いかたは、意味的に一体化した語句の間に助詞を割り込ませるといったニュアンスを帯びるから、それを上代語に関して用いることにはやはり問題がある。

動詞が重なったとか連接したとかと言える例のなかには、歌に「飛翻来鳴令響（飛び翔り来鳴き響もし）」〔九・一七五五〕

や「宇知嘆之奈要宇良夫礼之努比都追（打ち嘆き萎えうらぶれ偲ひつつ）」〔十九・四一六六〕のようなものがある。また、『続日本紀』所載の宣命や『延喜式』所載の祝詞などの散文にも、「聞食驚伎悦備貴備念久（聞こし食し驚き喜び貴び思ほさく）」〔十三詔〕や「待防掃却言排坐弖（待ち防ぎ掃ひ却り言ひ排け坐して）」〔御門祭〕のようなものが見える。よく読めば、どれにも、複数の語が意味的に結び付いた部分と、それらが重なっただけの部分とが混在していることがわかる。しかし、形態面では多くの語が単に直列的に連なっているだけである。(4)

このように、数種の活用語の連用形が、それも無助詞のままで連接した表現は、歌・散文ともに例が少なくない。だから、現代語のように意味的に緊密に結び付いた「複合動詞」は上代にはまだ存在しなかったのだという見解・主張が生まれるのも、当然のこととして理解できる。

二

本稿の表題を、「二つの活用語の間に助詞がある表現」とした。しかし、この表題に合致する用例の実態はなかなか複雑であり、前提的に確認しておくべきことが、右に述べたこと以外にも三点ある。論述がやや錯綜することにはなるが、三点について具体的に説明する。

その第一点は、活用語の間に位置する助詞は、さきに引用した「語りし継げば」「帰りも来やと」に含まれる「し」「も」や、既出の諸例に含まれる「か」「そ」「や」「は」などのような単純なものばかりではない、ということである。たとえば、「笠も着ず出乍曽見之」〔十一・二六八〕、「波高み過而夜将行」〔七・二七四〕、「長き日を麻知可母恋牟」〔三十・四三一〕は、二つの動詞の間に複数の助詞から成る「つつそ」「てや」「かも」が位置する表現である。これに対して、「咲

く花を移弖見流ごとに…」〔十八・四一三〕、「露霜寒み盛須疑由君」〔八・一六〇〇〕、「昼は咲き夜は恋宿合歓木の花」〔八・一四六一〕という、同じ動詞の間に助詞のない例がある。このような組の例が、実際に少なからずある。よく知られた、

1　大和には　鳴而歟来良武　呼子鳥　象の中山　呼曽越奈流　〔一・七〇〕

という歌では、「鳴きてか来らむ」に複数の助詞「てか」が用いられており、「呼びそ越ゆなる」には単独の助詞「そ」が用いられている。

複数の助詞を含む例のうち、接続助詞の「て」「つつ」をその一つとして含むものがきわめて多い。やはり、一口に「二つの活用語の間に助詞がある表現」とは言っても、これに該当する用例の実態は複雑である。

ただし、接続助詞の「て」「つつ」が二つの活用語の間に位置することは現代語にもよくあるから、それは上代語を特徴づける表現だとは言えない。よって、単独の接続助詞が活用語間に位置する例も、ほかの助詞と重なった接続助詞が活用語間に位置する例も、ともに今回の調査の対象から除外すべきことになる。

確認しておくべきことの第二点は、「麻里布の浦に也杼里可世まし」〔十五・三六三〕や「今は吾は和備曽四にける」〔四・六四四〕のような表現にかかわることである。言うまでもなく、これらは「宿り（を）か為まし」「侘び（を）そ為にける」という意味のものである。「宿り」「侘び」は動詞の連用形が名詞に転成したものであり、それに助詞「か」「そ」が付き、あとにサ変動詞の未然形の「せ」、連用形の「し」が続いている。連用形に由来する名詞を含む表現はもともと構文が異なるから、このような例も調査の対象とはならない。

確認しておくべき第三点は、本稿の表題をあえて「二つの活用語の間に助詞がある表現」とした理由である。それ

は、「二つの動詞の間に…」という条件に合致する例を集めていけば、ある一群が調査から漏れる結果になるからである。つまり、調査の範囲を動詞に限定すれば、「花は過ぐとも可礼受加奈可む」〔十七・三九一七〕、「君待つ夜らは不明毛有ぬか」〔十・二〇七〇〕など、動詞ではなく助動詞「ず」と動詞との間に助詞が位置する例を、当初から排除することになるのである。間に「か」「も」があるこれらの例は、二つの動詞が構成した既出の諸例と、構文面では本質的な差異が認められない。助詞がなく、「ず」に続いて動詞を用いた、「網捕りに捕りてなつけな可礼受鳴がね」〔十九・四一八三〕、「春雨の心を人の不知有なくに」〔十・一九一六〕などの例も実際にある。連なった二つの動詞がそれぞれの意味を独立的に表すものだった可能性を考慮すれば、動詞の連用形に別の動詞が続く例と同様に、「ず」の連用形に動詞が続く例もまた視野に入れることが必要である。これが、本稿の表題をあえて「二つの活用語の間に…」とした理由である。

以上のことを確認したうえで用例を調査する場合、その対象となる助詞は、狭義の係助詞である、

A か　B や　C そ／ぞ　D こそ

の四種と、広義のそれである、

E し　F も　G は

などの三種であり、計七種に及ぶ単独の助詞である。

狭義の係助詞には、一般に「なも」も含まれる。しかし、これは歌には用いられない。散文には百ほどの用例が見

えるが、二つの活用語の間に「なも」が位置するものは皆無である。

まずは、二つの活用語の間に助詞がある表現の、用例上・用法上の実態がどのようなものだったのかを、助詞ごとに実例を見ながら確認していくことにする。

三

A〜Gの係助詞が間に位置する表現には、個々の助詞の機能に応じた意味上・構文上の特徴がそれぞれ認められる。

初めに、Aの「か」が間に位置する例を見てみる。「か」が明記されたものだけを対象とすれば、「散香過奈牟」〔六・一吾四〕と同じ句がほかに三例、「待可将恋」〔三・一吾三〕と同じ句がほかに一例あるのを初めとして、計二十二の例がある。全例が、「…か」を「…む」または「…らむ」が承けたものになっている。なかに、「奈良の都を不見歟将成」〔三・三三〕や「我が恋ふらくを不知香安類良武」〔四・七二〇〕のような、「…ずか……む／…ずか……らむ」が計六例ある。

特に興味深いのは、「弓の共佐尼加和多良牟」〔三千・四三九四〕つまり「さ寝かわたらむ」という例である。この例の場合、「さ寝」と「わたる」は意味的に対等な関係にあるのではない。前項の「さ寝」は「ともに寝る」という根幹的な意味を表す動詞だが、後項の「…わたる」は「ずっと……し続ける」という意味を添える補助動詞的な語である。しかし、根幹的な意味を表す動詞と補助的な機能をもつ語との間に、「か」が位置しているのは意外である。補助的な語は、根幹的な動詞に付随するかたちで初めてその機能を果たしうるものだと考えられるが、両者の間に助詞のあることが、「…わたる」が補助的な機能を果たすのを妨げなかったのだろうか。また、「…わたる」は、本来の意味をまだ濃厚に保持していたのだろうか。

逆の面で興味を引くのは、「萩の花ともにかざさず安比加和可礼牟」〔二十・四五五〕に見える「相ひか別れむ」という例である。これの「相ひ…」は、辞書の類では「ともに……する」という意味を添える接頭辞として扱われており、『萬葉集』だけでも二十種を越える動詞に付いている。そうした接頭辞と根幹的な動詞「別る」との間に助詞が位置するのは、やはり意外である。上代では、接頭辞の「相ひ」に本来の「合ひ」という意味がまだ濃厚に残っていた、ということだろうか。

今回の調査の対象とするのは、単独の係助詞が二つの活用語の間に位置する例だ、という意味のことをさきに述べた。しかし、ここで例外的に言及しておきたいのは、既出の「長き日を待ちかも恋ひむ」〔三十・四三二〕と同様の、二種の係助詞から成る「かも」が間に位置する例である。(5) それは、「梅の花落鴨来と…」〔十・一八四〕や「寄そりし君は不相鴨将有」〔十一・二七三〕を初めとして、十三例ある。「かも」が間に位置する例は、単独の「か」が位置する例と本質的に差異がないように見える。ただし、ここに例示した「散りかも来ると…」と、それに別伝として添えられた「開香裳落と…」と、「桜花開哉散と…」〔十一・三二九〕の三例は、ほかの十例とは異なって、「…む」「…らむ」に続かないものになっている。単独の「か」の場合とは、若干の構文上の差異があったものか。

「か」の次に見るのは、Bの「や」である。「や」の訓み添え例を除いて、それが明記された例は二十一ある。うち九例に、「片思ひに思哉将去」〔四・五三六〕や「水隠りに恋哉将度」〔十一・二七〇七〕のように「哉」が用いられており、どれも一般に「や」と訓じられている。それらの表現と、「や」に「八」「也」「屋」「夜」をあてたほかの表現との対応関係から見て、九例の「哉」を「や」と訓じることに特に問題はない。「我がためは照哉多麻波奴」〔五・八九二〕と「荒し男も多志夜波婆可流」〔三十・四三七二〕つまり「立しやはばかる」のほかは、「…や」に「…む」が応じている。

助動詞「ず」と動詞との間に「や」が位置するものに、「人の寝る味眠は不寐哉恋将渡」〔十二・二六六三〕と「かの子ろ

と宿受夜奈里奈牟（ねずやなりなむ）」〔十四・三五六五〕と「初鷹狩りだに不為哉将別（はつたかがりだにせずやわかれむ）」〔十九・四二四九〕の三例がある。このうち最初の例は、「ずや」とそれに続く動詞が別の句に分属している点で、やや特異な例である。この例では、「寝ず」と「恋ひ」との関係よりも「恋ひ」と「わたる」との関係のほうが意味的に密接だと思われる。

「か」の場合と同様の例として興味深いのは、右にあげた「照りやたまはぬ」〔五・八九二〕や「君が使を待也金手武（まちやかねてむ）」〔十一・二五八〕や「恋也将渡片思ひにして（こひやわたらむ）」〔十・一九六九〕などに用いられた、「…たまふ」「…かぬ」「…わたる」のことである。これらの語の意味・機能はやはり補助的なものだが、根幹的な意味を表す動詞との間に「や」がある。機能は補助的なものであっても、本来の意味を濃厚に保っていたものか。

さきには、「か」に関連して、「かも」の用法・用例にも例外的に言及した。同様に、「や」が「も」と結合した「やも」の場合は、「あぶり干す人も在八方（あれやも）」〔九・一六九八〕や「相思はぬ君に安礼也母（あれやも）」〔十五・三六九一〕のように、已然形に付いて反語を構成するのに用いられており、連用形には下接しない。「玉は乱れてありと不言八方（いはずやも）」〔三・四二四〕の「やも」は「ず」の終止形に付いて強い語気を表しており、「鼻ひ紐解け待八方（まてりやも）」〔十一・二六〇八〕の「やも」は「り」の終止形に付いて疑問を表している。

Cの「そ／ぞ」が間にある表現はどうか。さきにあげた「見まく欲（ほ）り恋ひそ暮らしし」〔十一・二六八二〕や、既出1の歌の「象（きさ）の中山呼びそ越ゆなる」を初め、「そ／ぞ」には十一の例がある。「ず」と動詞との間に「そ／ぞ」が位置するものに、

2　おしてる　難波の崎に　引き登る　赤のそほ舟　そほ舟に　綱取り懸け　引こづらひ　ありなみすれど　言ひづらひ　ありなみすれど　有双不得序（ありなみえずぞ）　所言（いはれ）にし我が身　〔十三・三三〇〇〕

3　かくばかり　恋ひむとかねて　知らませば　妹をば美受曽　安流倍久安里家留　〔十五・三七二九〕

の二例がある。[6] これに関連して、次の歌の「告げにぞ来つる」も無視することができない。

4　彦星は　嘆かす妻に　言だにも　告尓叙来鶴　見れば苦しみ　〔十・二〇〇六〕

「告げにぞ来つる」は、一般に「告げるために来たことだ」の意に解されている。しかし、「に」は「ず」の古い連用形の「に」だと見れば、「告げずに来たことだ」の意にも解しうる、という指摘がある。同じ「に」は、4の歌の三首あとにも「飽き足ら尓袖振る見えつ」〔十・二〇〇九〕と用いられているし、『萬葉集』には「行き過ぎかて尓思へれば」〔三・二五三〕や「たどきを知ら尓音のみしそ泣く」〔十五・三七七〕など、二十余の「に」の例がある。4の歌では、「ずぞ」ではなく古い「にぞ」を用いたと理解しても、構文上は特に問題がない。実際に、「などかも妹に不告来にけむ」〔四・五〇九〕という類似した表現の例がある。

2と3のどちらでも、「そ／ぞ」までの部分とそれを承ける部分とが別の句に分属している。そのつもりで見れば、「ず」の例ではないが、長歌の後半部である、

5　天皇朕　うづの御手もち　掻撫曽　祢宜賜　打撫曽　祢宜賜　帰り来む日に　相飲まむ酒そ　この豊御酒は　〔六・九七三〕

という表現にも、同種の分属が見られる。「そ」の前後にある「搔き撫で」「打ち撫で」と「労ぎたまふ」とは、意味的に緊密に結び付いているわけではない。

また、「そ／ぞ」の場合にも、「流るる涙止曽金鶴」〔三・一七八〕や「在曽金津流」〔四・六一三〕のように、動詞と補助的な「…かぬ」との間に「そ／ぞ」が位置する例がある。

狭義の係助詞のうち、残るのはDの「こそ」である。表記面では「ず」に動詞が続くかたちになっている「瀬を速み不相有のちも我が妻」〔十一・二四八〕という例があり、一般に「こそ」が訓み添えられている。しかし、「不相有」には別訓を与えることも不可能ではなさそうだから、確かな例だとは言えない。(7)

四

Eの「し」の例は、本稿の副題にあげた「語りし継げば」と「不知師有者」〔十・二五三〕の二例、そして「思ふ」が反復された「念四念者」〔七・一二三〕と「念四念婆」〔十九・四一九一〕の二例を含めて、計十七例ある。すべての例が、「…し……ば」という呼応関係を構成している。

補助的な機能の「…わたる」に、「年長く夜美志渡礼ば…」〔五・八九七〕、「かくのみし恋思度ば」〔九・一七六九〕、「ほととぎす奈枳之和多良ば…」〔十八・四〇九〇〕の三例がある。ほかに、やはり補助的な「…えず」を含む「世間を背之不得ば…」〔三・二一〇〕という例もある。

これとは正反対に、接頭辞とされる「相ひ…」をもつものに、「不相志思ばうべ見えざらむ」〔四・七三二〕と「かくしつつ安比之恵美てば…」〔十八・四一三七〕の二例がある。

右でも述べたように、動詞の連用形とそれに続く動詞との間に「し」がある例では、十七例のすべてが「…し……ば」という形式になっている。ここで問題になるのは、一般に「し」を含むかたちで訓じられ、その訓に添った解釈が行われている歌句である。それは、次の三首の傍線を付した部分である。

6　人の寝る　味眠（うまい）は寝ずて　はしきやし　君が目すらを　欲嘆　或る本の歌に曰はく「君を思ふに　明けにけるかも」　〔十一・二三六九〕

7　可之布江（かしふえ）に　鶴鳴（たづ）き渡る　志賀の浦に　沖つ白波　多知之久良思毛　一に云はく「美知之伎奴良思」　〔十五・三六五四〕

8　我妹子に　恋度　剣刀（つるぎたち）　名の惜しけくも　思ひかねつも　〔十一・二四九九〕

6の第五句「欲嘆」には、「欲りし嘆（ほ）かふ」「欲りし嘆くも」「欲りて嘆くも」「欲りて嘆かむ」などの訓がある。前の二訓では動詞の間に「し」があるが、これは構文的にまったく不可能な訓だというわけではない。しかし、ほかの全例が「…し……ば」の形式になっていることを重視すれば、前の二訓は例外的なものになる。「し」を含まない、あとの二訓のどちらかを採用するのが、構文面で妥当である。

7の第五句である「多知之久良思毛（たちしくらしも）」と、その別伝である「美知之伎奴良思（みちしきぬらし）」には、古くは「立ち重（し）くらしも」「満ち重きぬらし」と解する説があった。「重く」「重き」は「頻（し）く」「頻き」の意である。現在では、これらを「立ちし来らしも」「満ちし来ぬらし」の意に解するのが普通である。しかし、そのように、本伝と別伝の「之」を助詞にあてたものだと見れば、6の場合と同様の理由によって、用法が例外的なものになる。本伝の「之久」と異伝の「之伎」は、かつてのように「頻く」「頻き」の意だと解するのが適切である。(8)

8の第二句「恋度」は、古くから「恋ひしわたれば」と訓じられている。さきに引用した「かくのみし恋ひしわたれば」は、

9　かくのみし　恋思度者（こひしわたれば）　たまきはる　命も吾は　惜しけくもなし　〔九・一六九〕

という、8に類似する歌の第二句だから、8の「恋度（こひしわたれば）」という訓には問題がない。

Fの「は」が用いられたものには、さきにあげた「立ちは上（のぼ）らず」を含む十四例がある。「は」の用法・機能から見て、「人には着せそ濡者（ぬれは）漬跡（ひつとも）裳」〔三・三四〕や「あぢむらの去来者（かよひはゆけど）行跡…」〔四・四八五〕や「延（は）ふつたの由伎波和可礼（ゆきはわかれず）受…」〔十七・三九一〕など、「…は」に仮定・逆接・打消しの表現が応じているのは納得できる。「…は……とも」が七例、「…は……ず」「…は……ずて」が計六例ある。例外となるものに、「…は……がに」という呼応関係を構成するかと見える、

10　おもしろき　野をばな焼きそ　古草に　新草（にひくさ）交じり　於非波於布流我尓（おひはおふるがに）　〔十四・三五二〕

という東国の歌がある。第五句の「於非波」の「波」は、「は」とも「ば」とも訓じられている。「は」だとその機能に不明な点が残るから、別の面で問題が生じる。「は」「ば」の適否については、どちらにも類例がなくて判断不能である。

補助的な意味・機能をもつ動詞の前に「は」が位置するものとしては、「奈礼波（なれは）不益（まさらず）恋こそまされ」〔十二・三〇四八〕と

「いや初花に佐伎波麻須とも」〔三千・四吾〕の二例が見える程度である。二例に用いられた「…まさる」「…ます」は、「程度・状態がはなはだしくなる」という意味を添える語である。「は」の直前にある「馴れ」「咲き」は動詞の連用形であり、名詞に転成したものだとは理解しにくい。これらの「…まさる」「…ます」もまた、本来の意味を濃厚に保っていたのだろうか。

Gの「も」が間に位置する例は、「髪梳の小櫛取毛不見に」〔三・二七八〕や「な行きそと変毛来哉と…」〔十二・三三〕などのように、それが明記されたものだけでも四十例ほどある。ほかに、一般に「も」の訓み添えられているものが、「沾将堪香聞」〔六・九九〕や「白浜波の不肯縁…」〔十一・二六三〕など十例ほどある。「も」の用法・機能が多様であることを反映して、「…も」を承ける表現の意味もまた詠嘆・願望・推量・打消し・疑問などさまざまだが、打消しが最も多くて十余例に及ぶ。

「今日の日は不晩毛荒粳」〔十・一八八三〕や既出の「明けずも有らぬか」〔十・二〇七〇〕などは、「ず」の連用形に助詞が続いた例である。一般に「も」が訓み添えられている「縫将堪可聞」〔十・二〇六五〕や「不肯盛」〔十一・二六三〕は、「縫ひあふ」「守りあふ」の間にそれが訓み添えられた例であり、補助的な「…あふ」を含む例である。

補助的な活用語の前に、明記された「も」が位置するものに、「冬の夜の明毛不得を…」〔九・一七八七〕や「思へども念毛金つ」〔十一・二八〇三〕や「我が寝る夜らは数物不敢かも」〔十三・三三九〕などがある。「…もえず」「…もかぬ」「…もあふ」の例である。「花橘に安倍母奴久がね」〔十八・四一〇二〕の「…合へ」は、「一緒に……する」の意を表す接頭辞的な意味のものだろう。本来の「合わせる」という意味が濃厚に残り、まだ接頭辞的なものにはなっていなかったのかも知れない。

例外的なのは、二つの動詞の間に「も」のある、次の歌の表現である。

11　この頃は　千歳や往裳（ゆきも）　過（すぎぬる）と　吾や然思（しか）ふ　見まく欲（ほ）りかも　〔四・六六〕

助詞のない「行き過ぐ」は十一例あるから、それはごく普通の表現だったことが明らかである。しかし、右の歌ではそれが第二句と第三句とに分属しているだけでなく、間には「も」がある。そこで、十一例の「行き過ぐ」の用法を詳しく見てみると、すべてが場所を通過するのに用いられており、右の「行きも過ぎぬる」だけが時間を経過するのに用いられている。もともと場所つまり空間に用いられていたものが新たに時間にも用いられるようになったのだろうが、空間的な用法と時間的な用法との間に相違があった可能性が想定できる。

「も」の用例のなかに、その機能について判断が難しいものがある。それは、

12　天雲の　そくへの極み　天地の　至れるまでに　杖策毛（つゑつきも）　不衝毛去（つかずもゆき）て　夕占問（ゆふけ）ひ　石占（いしうら）もちて…　〔三・四一〇〕

13　時ごとに　いやめづらしく　咲く花を　折毛不折毛（をりもをらずも）　見らくし良しも　〔十九・四一六七〕

などの「も」である。12の「杖突きも突かずも」は「杖を突いてでも、杖を突かないでも」の意で、結局は「なんとしてでも」ということである。13の「折りも折らずも」は「折っても折らなくても」の意である。どちらも、「…も……も」という形式で正反対の二つの事態を描写した表現であり、「去きて」「見らく」の前にある「も」の用法には並列のニュアンスが含まれる。

12の「杖突きも突かずも行きて」は、あえて言えば、「杖突きも行き、杖突かずも行きて」を縮約した表現だとい

うことになるだろう。また同様に、13の「折りも折らずも見らくし良しも」は、「梅の花折毛不折毛見つれども…」〔六・一六五三〕の例から判断して、「折りも見らくし良く、折らずも見らくし良しも」を縮約した表現だろう。12の「杖突きも行き」「杖突かずも行きて」のそれぞれにおいても、13の「折りも見らくし良く」「折らずも見らくし良しも」のそれぞれにおいても、単独では「も」は以上で見た諸例と同じ用法・機能をもつものだったはずである。しかし、「…も……も」という反復形式になったために並列のニュアンスを帯びやすかったのではないか。「恵美々恵末須毛」〔十八・四一〇六〕つまり「笑みみ笑まずも」はこれらの類例だが、いささか異なる点がある。(9)

これまで見てきた、二つの活用語の間にA～Gの助詞が位置する実例は、確例のないDの「こそ」を除いて、『萬葉集』だけでも百を超える。この種の表現は、上代ではきわめて一般的なものだったのである。

五

A～Gの助詞を含む諸例を見て気になるのは、「相ひ…」「合へ…」や、「…たまふ」「…かぬ」「…わたる」「…えず」「…あふ」「…まさる」「…ます」などの、補助的な機能をもつ語の用法である。根幹的な意味を表す動詞とこれらの補助的な機能をもつ語との間にも、さまざまな助詞が位置しえた。その理由については、既に述べたように、上代では文のなかに現れる語と語との意味的な関係が緩かったらしいこと、また現代人には補助的な語だと見えてもそれらは本来の意味をかなり保持していたらしいこと、などが想定される。

ただし、文中に現れる語と語との関係がいかに緩いものだったにしても、動詞とそれに付く助動詞との間に助詞が位置する例はない。助詞が間に位置しうるのは、既出の「照りや給はぬ」〔五・八九二〕のような本動詞と補助動詞との関

係が限界であり、それ以上に密接な関係にある二語の場合は、間に助詞が位置することは許容されなかった。「有りそかねつる」〔四・六三〕に含まれる「そ」が、補助動詞的な語と助動詞との間に位置する「有りかねそつる」というような表現は、実際には存在しなかったのである。「有り」と「かねつる」との関係は緩かったが、「かね」と「つる」との関係は既に緊密なものになっていたのだろう、と推測される。

「吾は言ひ手寸」〔十二・二九四七〕や「さ夜更け去家里」〔十一・二六二〕や「霞み多流良牟」〔三十・四八九〕などのように、実際の表現では複数の助動詞を重ねて用いることも多かった。しかし、二つの助動詞の間に助詞が位置する例は見あたらない。そのことは、以上で見た補助的な語と助動詞との関係と同様に、あるいはそれ以上に、助動詞どうしの関係が緊密なものだったことを示す。

ところで、上代語の文では語と語との関係や、文節と文節との関係が現代語よりも緩かったのではないか、という想定[10]を支持する構文上の現象はほかにもまだある。

「喚子鳥吟八汝来」〔十・一九四一〕の「鳴きや汝が来る」では、「汝が」という主語が「鳴きや来る」の間に位置している。これに対して、「伊勢の海ゆ鳴来鶴の…」〔十一・二八〇五〕のように、「鳴き来」という無助詞の例がある。その「鳴き来」の間に「や」があり、そのあとに「汝が」の続いたものが、「鳴きや汝が来る」である。「手折来而」〔八・一五八六〕に対する「手折曽我来師」〔八・一五八二〕その他、類似する例はほかにいくつかある。

文を構成する語と語との関係について考えるにあたっては、次のような例があることも忘れてはならない。

14　惶八　神の渡りは　吹く風も　和には吹かず　立つ波も　おほには立たず…　〔十三・三三五〕

15　大坂に　阿布夜袁登売袁　道問へば　直には告らず　当岐麻道を告る　〔記七七〕

16　枚方ゆ　笛吹き上る　阿符美能野　毛野の若子い　笛吹き上る　〔紀九八〕

14の「恐きや神の渡りは…」と15の「逢ふやをとめを…」のどちらも、活用語の連体形とそれに続く名詞との間に助詞の「や」が位置する例である。16の「近江のや毛野の若子い…」もそれに酷似するもので、直接に「近江の毛野」と続くはずのところだが、「の」のあとに「や」がある。この用法の助詞は「間投助詞」と呼ばれ、語調を整える機能や詠嘆を表す機能を表すものだと一般に説明されている。そして、「よ」「を」などがその類例だと言われている。

上代語では間投助詞が多く使われており、15と16のように『古事記』『日本書紀』にも少なからず例が見える。間投助詞が多く使われたのは、やはり文を構成する成分と成分との関係が緩かったからだろう、という指摘は古くからある。

15と16の歌謡が収められた『古事記』『日本書紀』だが、両書にも活用語の間に係助詞が位置する例はある。まず、「か」を含む表現が『古事記』に見える。

17　八田の　一本菅は　子持たず　多知迦阿例那牟　あたら菅原…　〔記六四〕

仁徳天皇が八田若郎女に贈った歌であり、「子持たず立ちか荒れなむ」は彼女が子を持たないままに一生を終えることを喩えたものである。

また、『古事記』『日本書紀』には、「そ」を含む「い伐らずそ来る梓弓檀」という例があり、それぞれ「伊岐良受

曽久流…」〔記五〕、「伊枳羅儒層区屢…」〔紀四〕と表記されている。さらに、『萬葉集』に二例あった「思ひし思へば」に類する「佐泥斯佐泥弖婆」〔記八〇〕つまり「さ寝しさ寝てば」が、『古事記』に二例ある。「は」を含むものに「いくみ竹伊久美波泥受」〔記九一〕の「い隠みは寝ず」という例が見え、「かも」を含むものに「美延受加母阿良牟」〔記二三〕と「弥曳孺哥謨阿羅牟」〔紀六六〕、つまり「見えずかもあらむ」という例がある。

上代の散文ではどうか。宣命には、「ずや」という助動詞と係助詞を含む文が見える。

18　明日よりは、大臣の奏ひし政は不聞看夜成牟。明日よりは、大臣の仕奉りし儀は不看行夜成牟。〔宣一詔〕

同じ詔には、「かも」を含む「誰に任之加母罷伊麻須、孰に授加母罷伊麻須」という例もある。この詔は、大臣である藤原永手の死を悼んで光仁天皇が発したものであり、同天皇の当惑と哀惜とを直截に表明したものである。「ずや」「かも」のどちらも、ほかの詔に例は見えない。

祝詞の例としては、「恐美毛恐美毛申賜はく…」〔出雲国造神賀詞〕の「恐みも恐みも申す」と同じ表現がほかに一例と、類似する表現が一例あるだけである。祝詞には、「かけまくも恐支明御神と…」〔同〕という形容詞「恐し」の例もあるが、「恐みも恐みも申す」の「恐み」は動詞「恐む」の連用形である。(11)

数がきわめて少いとは言え、これらの例が散文のなかに見える事実は、二つの活用語の間に助詞がある表現は、韻文だけではなく散文にも用いることが可能なものだったことを示す。実際に例が僅少なのは、現存する宣命や祝詞にはそれを用いるべき場面や文脈がほとんどなかったからだろう。(12)

六

二つの活用語の間に助詞がある構文は、中古にはどうなったのか。調査してみると、中古だけでなくそれ以後も、この構文の例は文献に多く出ている。しかも、それらを細かく見てみると、上代の文献には例のないさまざまな組み合わせが新たに工夫されて用いられた、ということがよくわかる。

現代語では、複合動詞の間に助詞が位置することは原則として許容されない。しかし、さきに引用した「相ひか別れむ」「相ひし思はねば」の「相ひ…」に近いものとして、「あい変わらず」と同義の「あいも変わらず」という言いかたがある。似た表現に、「引きも切らず」という言いかたもある。「あいも変わらず」と「引きも切らず」は、「…も……ず」という同じ形式の否定表現になっている。似た言いかたをほかに探せば、「見もせず」「ありはしない」のような「…もせず／…はしない」という形式がある。動詞の連用形を、助詞を介してサ変動詞が承ける例であり、これらもまた「…ず」という否定表現になっている。しかし、「その辺りを見て回った」「汗を拭きつつ歩く」のように、「て」「つつ」などの接続助詞が位置する表現なら、既に述べたように現在でも普通に用いる。

現代語の「複合動詞」に、「持ち去る」「泣き叫ぶ」「動き出す」「読み終える」などの例がある。これらのうち、「持ち去る」「泣き叫ぶ」などの類を「語彙的な複合動詞」と呼び、「動き出す」「読み終える」などの類を「文法的な複合動詞」と呼んで、両者を区別しようとする説がある。[13] 前者は二つの動詞が意味的に強く結び付いたものであるのに対し、後者は「…出す」「…終える」を種々の動詞に付して規則的に類例を作ることができるものである。その点で両者は根本的に異なるのだ、というのである。

しかし、上代語では、根幹的な意味を表す動詞と、従属的・補助動詞的な機能をもつ活用語との間にさえも、多種の助詞が位置しえた。現代語の「複合動詞」と同じような形態をもってはいても、やはり意味的には大きく異なるものだったのである。改めて言うまでもないことだが、「語彙的な複合動詞」「文法的な複合動詞」という現代語の複合動詞に関する分類は、上代語にとっては有効性の低い分類だと言える。

注

(1) 「語りつげとし」と「語りし告げば」について、二つの「つぐ」は別の語ではないのか、という疑問がわかないでもない。しかし、表記が異なるから別の語ではないかと疑ってしまうだけのことであり、動詞としては一つの「つぐ」である。『萬葉集』では、「語りつぐ」を「語継」「語告」「語嗣」「語続」などさまざまなかたちで表記しており、それぞれの用例に意味的に異なる点はない。「語りつげとし」「語りし告げば」のどちらも、過去のできごとを「言い伝える」「伝承する」という、同じ意味の「語り継ぐ」の用例である。

(2) 上代語に関しては、中村幸広「上代複合動詞の緊密度について」〔『國學院高等学校紀要』十三輯、一九七一年〕があり、多くの用例があげられている。

(3) 複合動詞にかかわる諸現象・諸問題については、関一雄『国語複合動詞の研究』〔一九七七年、笠間書院〕に従来の諸説が取りあげられ、検討・批判が加えられている。

(4) 歌の表現の場合は、音数律や句切れなどがあるから、散文の場合よりも動詞間の意味関係が理解しやすかったと思われる。

(5) 「かも」を「…まし」が承ける「消かもしなまし」という表現が、なかに三例ある。これは、構文的には「消かも死なまし」の意ではない。具体的に言うと、たとえば「消鴨死益(けかもしなまし)」〔十・三五六〕に用いられた「死」は、表記面で歌意を強調するためにサ変動詞の連用形「し」にあてた借訓字である。「消かも為(し)なまし」が正しい理解であり、「消かも死なまし」は借訓字に影響された誤った理解である。このことについては、小著『上代語構文論』〔二〇〇三年、武蔵野書院〕の第Ⅶ部第一章で私見を述べた。

（6）　2の歌の「ありなみ得ずそ言はれにし我が身」をどのように理解すべきかについては、小著『上代語の表現と構文』〔二〇〇〇年、笠間書院〕の第Ⅱ部第八章で私見を述べた。

（7）　『古今和歌集』には、「こそ」が間にある「鳴きこそわたれ」「燃えこそわたれ」などの例が見える。

（8）　これについては、小著『萬葉集構文論』〔二〇〇一年、勉誠出版〕の第Ⅰ部第六章で私見を述べた。

（9）　判断が難しい「も」の例は、ほかにもまだある。それは、「言不得名不知（えずしらず）」〔三・三九〕のような例に含まれる「も」である。この例に「も」を訓み添えるべきことは、「言毛不得名付毛不知（えずしらず）」〔三・四六〕の例から見て明瞭である。「速川の往文不知衣袂（もしらずころもで）の反裳不知（もしらず）」〔十三・三七六〕の「往」「反」が、もともと連体形として「ゆく」「かへる」と訓じられていたことを考慮すれば、これらの「も」が以上の諸例と同様の「も」なのかどうか、断定できないのである。しかし、近時は「言」「名／名付」「往」「反」のどれも「言ひ」「名づけ」「行き」「かへり」と訓じられている。それが妥当な措置であっても、「も」は以上の諸例と同様に連用形に付いたものか、連用形に由来する名詞に付いたものか、のどちらかである。

（10）　その視点に立って書かれたものに、馬淵和夫『上代のことば』〔一九七〇年、至文堂〕がある。

（11）　上代語の動詞「恐む」と形容詞「恐し」とについては、小論「散文と韻文のミ語法」〔『國語國文』平成二十六年一月号〕に例を挙示し、私見を述べた。

（12）　歌つまり韻文と宣命・祝詞などの散文との間に、どのような構文上・語法上の差異があったのか。この問題については、小著『上代の韻文と散文』〔二〇〇九年、おうふう〕の第Ⅰ部に含まれる四つの章と、注（11）にあげた小論で私見を述べた。

（13）　影山太郎『文法と語構成』〔一九九三年、ひつじ書房〕。

（日本語日本文学科　教授）